好きな速度で味わって、『アーモンド』

2021年4月
眞鍋由比

少し前のインターネットの記事で

「映画を早送りで観る人たち」の出現が示す、恐ろしい未来」
https://gendai.ismedia.jp/articles/-/81647

というものがあった。1.5倍速で見て、あらすじだけを理解して、あるいは面白そうな場面だけ見てあとはWikipediaで補足して友達のとの会話についていく。そんな人たちが増えている。NetFlixなどの映画コンテンツがあふれていて、とても一つ一つ見ている時間がない。YouTubeやニコ動でも早送りのボタンがあって利用する人は多いと。
それでは映画を楽しんでいるとはいえない…まるで映画を観たというアリバイを作っているみたいだ。冗長と思える間や、不要と思えるシーンに表現されているものを汲み取る努力はしないと、する時間がないと。
ただ消費されるだけの映画･･･いやそういうレベルのものもあるけれど、と記事を結んでいた。
そういう意味では本を読むのは自分のペースで読めるからいい。
ソン・ウォンピョン『アーモンド』祥伝社　2019年
最初から映画を見ているような感覚で読めたこの本。怒りや恐怖などの感情を感じない少年の青春物語。喜怒哀楽の感情をうまく感じることができない１６歳の高校生・ユンジェ。母親は息子のために必死で「こういうときにはこういう表情をするの」と感情を、というより感情があるフリを暗記させ、厳しくしつける。父はいないが、暑苦しいほどの愛情の母と祖母。その二人が目の前で通り魔に襲われても、彼に感情はわかない。ひとりぼっちになった彼が母がの古書店を受け継ぎ、一人で生活することに。何かと気にかけてくれるパン屋の５０代の男性が現れ、少しオー・ヘンリーの短編のような心が暖まる気持ちになる。そして同級生の問題児・ゴニと出会う。暴力的で父親の手に負えないゴニは誰よりも感情的で、ユンジェとはある意味正反対なのだが、彼がなによりも欲しているもの、彼に欠けているものがユンジェにはあった。それを知ったとき、ユンジェは…。

ユンジェの視点から描かれる、感情を排して淡々と事実をつみ重ねていく文章表現はまさに映画的。自分の中で映画を上映しているような感じ。自分自身で感じてほしい。自分のペースで、ユンジェの中に生まれるだろう感情を。忙しさに紛れて、なにか、自分の大切なものを忘れてはいないだろうか？

全国の書店員が一番売りたい本を選ぶ昨年の本屋大賞の翻訳小説部門１位。2012年に創設された同部門で、アジアの本の受賞は初めて。